総説

# 重症心身障がい児病棟における小児看護学実習での学習効果に関する文献検討

松本 智津[1)] 富岡 美佳[1)]

キーワード：小児看護学実習，重症心身障がい児，学習効果

**要旨：**本研究の目的は、小児看護学実習において行われている重症心身障がい児病棟（施設）での実習について記載された文献を概観し、その効果・課題を明らかにすることである。医学中央雑誌 Web 版（Ver5）を用い、2007～2016 年の重症心身障がい児病棟での看護学実習における学習効果に関する内容が記述された原著論文 11 文献を対象とし、年代別、内容別に分析を行った。その結果学生の学びは、【重症心身障害児への看護】【障害のある児に対する理解の深まり】【重症心身障害児の特徴の理解】【生活環境の概要】【家族への支援】【生命の尊厳や権利】【多職種連携】【看護観の深まり】の 8 つのカテゴリーに集約された。重症心身障害児病棟での実習は、これまでの健康な小児、疾患をもつ小児への看護実習の展開に加えて、障害のある児への理解の深まりと生命の尊厳や権利などを学ぶ機会となることが示唆された。

## Ⅰ．はじめに

小児看護学実習は、少子化による小児病棟の減少、入院期間の短縮などの影響により、実習場所の確保や、病棟で患児を受けもち看護展開することが難しく、学びの機会が減少している現状がある。小児看護の対象は、あるあらゆる健康状態の子どもであり、健康な子どもから何らかの障がいをもつ子どもなど多岐にわたる。小児看護を学ぶ場を病院だけでなく、子どもたちの生活を支援する場を学ぶ場と考え実習場所が検討されている。

重症心身障がい児施設での実習は、障害のある子どもの成長・発達と健康状態の特徴を理解し、養育環境や実践されている看護についての意義、生命の尊厳と権利擁護について考えることができる。眞鍋（2011）は「重症児（者）施設での看護は、観察によって何か問題を見つける力や、安全で必要なケアを最小限の苦痛で行う技術、生活の質をより良く豊かにするための技術、障がいをもつ子どもと家族の気持ちに寄り添う心が必要で、これらは看護の基礎ということがいえる」と述べており、重症心身障がい児病棟で実習を行うことは、看護を目指す学生にとって意義あるものと考える。しかしながら、子どもと関わ

1) 山陽学園大学看護学部看護学科

ることが少ない学生も増加している中、小児看護実習で子どもと関わる時に、戸惑いを感じ不安気持ちを持ち実習をスタートする学生も散見する。さらに、障がいをもつ子どもと関わる経験も少なく、どのような看護支援が必要なのか、また、情報を得て対象理解を深め、情報を得てアセスメントするためのコミュニケーション技術に不安を持つ学生もいる。更に眞鍋（2011）は「初めは障害をもつ子どもとかかわること事態に困難を感じ、手を出せない学生もいるが、そのような困難を乗り越えたり、考えたりすることは、子どもたちの権利や生活、命を支援する看護の実習としては、貴重な体験となり、学びや看護観を深める機会となっている」と述べている。

そこで、小児看護学実習をより充実したものとしていくために、実習施設の一つとして重症心身障害児病棟での実習に焦点を当て、先行研究より学習効果を検討する。

## Ⅱ．研究目的

本研究は、小児看護学実習において行われている重症心身障がい児病棟（施設）での実習について検討された文献を概観し、その効果・課題を明らかにすることを目的とする。

## Ⅲ．用語の定義

学習効果：重症心身障がい児病棟（施設）での小児看護学実習において、学生自身が体験することで学び得た成果や変化とする。

## Ⅳ．研究方法

### １．対象論文の抽出

本研究では国内文献を対象とし、医学中央雑誌 Web 版（Ver5）を用い検索を行った。キーワード「障がい児」「重症心身障害児」「臨地実習」「看護基礎教育」を組み合わせ、原著論文のみを対象とし、2007～2016 年の 10 年間を検索した。文献は 50 件得られ、そのうち、重複文献および看護以外の医療職の研究論文を除外し、本研究の目的のである「学習効果」と「課題」について記述されているもの 11 件を分析対象とした。

### ２．分析の方法

得られた文献を、研究方法、目的、対象学年、実習方法、学び、課題の視点からマトリックスを作成し分析した。「学び」「課題」に関して関連する文脈を抽出し、データとして意味内容を検討し、類似性の高い内容に分類し、重症心身障害児病棟での実習の効果と課題を導き出した。

## Ⅴ．結果

### 1．対象論文の概要

対象となった論文 11 件の年次推移は図 1 のようになった。2007 年、2008 年、2010 年、2014 年が各 1 件、2009 年、2012 年が各 2 件、2015 年が 3 件と一番多かったが、発表件数として大きな差は見られなかった。

研究方法としては、質的研究 5 件、量的研究 1 件、量的・質的研究 4 件、文献レビュー1 件であった。質低研究として、面接調査が 1 件あったが、それ以外は全て実習の学びレポ

ートなどの分析であった。量的研究としては、自記式質問紙調査により実施されていた。内容は、重症児に対する実習前後の理解に関するもの（文献番号 7，8，9，12）と、重症心身障害児病棟で実習評価として、実習前後の不安の程度、患児の理解など初日の患者把握の程度、遊びの必要性や看護師の役割など成長発達に関する理解の程度、家族看護に関する理解の程度が問われたもの（文献番号 5）であった。

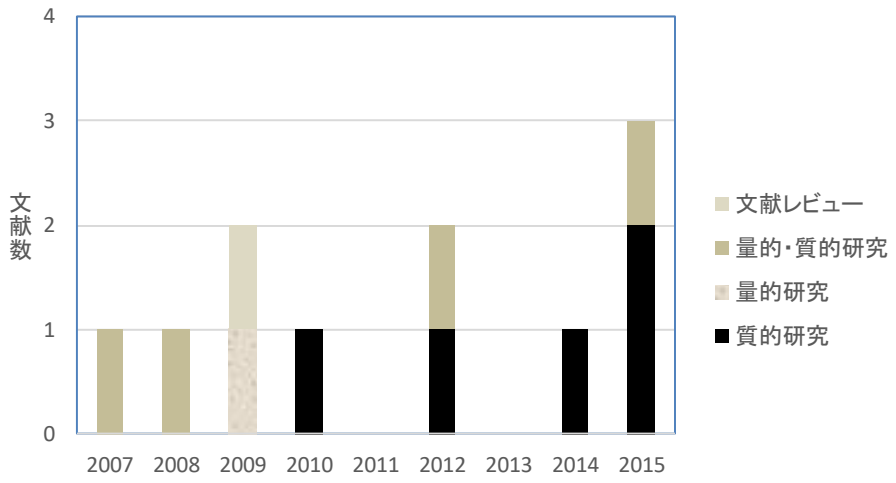


図1 対象文献の年次推移

研究目的としては（表 1）、障害児実習での学習効果に関するものが 6 件と一番多く、他、実習前後の不安の変化に関するもの 2 件、実習の意義に関するもの 2 件、実習のあり方の検討が 1 件であった。実習対象学年は、小児看護学実習での実習施設の 1 つとして行った 3 年生がほとんどで、1 件のみが基礎看護学実習で実習を行った 1 年生であった。実習方法としては、4 件が見学実習で、実習期間は 1~2 日であった。6 件は患児を受けもち援助を行う実習を、1 日～2 週間行っていた。6 件中 2 件は、1 日の実習ではあるが受け持ちをもち、更に看護師や実習指導者とともに医療処置を含む援助を見学・実践していた。看護師や実習指導者とともに行った医療処置としては、食事介助、おむつ交換、口鼻吸引、気管内吸引、体位変換など、受けもち患児に必要な看護援助に応じた内容であった。6 件中 4 件（1 週間実習 3 件、2 週間実習 1 件）は、小児看護学実習での看護過程の展開をおこなう実習であった。

2．重症心身障がい児病棟（施設）実習での学び（表 2）

重症心身障がい児病棟（施設）実習での「学び」に関して関連する文脈を抽出し、データとして意味内容を検討し、類似性の高い内容に分類した。結果、40 の文脈が抽出され、【重症心身障がい児への看護】【障がいのある児に対する理解の深まり】【重症心身障がい児の特徴の理解】【生活環境の調整】【生命の尊厳や権利】【家族への支援】【看護観の深まり】【多職種連携】8 つの項目に分類された。以下、データは〈 〉で示す。

1）【重症心身障がい児への看護】

【重症心身障がい児への看護】は、9 つのデータから集約された。内訳は、3 件が見学実習からの学び（文献番号 1，4）であり、〈重症児（者）との関わりと看護援助〉〈看護の役

表1 対象文献の研究概要

| 文献番号 | 発表年 | 研究方法 | 目的 | 対象学年 | 実習方法 | 学び | 課題 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2015 | 質的研究<br>（レポート内容分析） | 重症心身障碍児施設の見学実習の在り方の検討 | 3年生 | 1日<br>（見学実習） | 重症児（者）の特徴と生活環境<br>重症児（者）とのかかわりと看護援助<br>重症児（者）の家族への看護支援<br>看護観の深まり | 「目にしたこと」や「説明されたこと」を学生自身が意識的に学びに変えることができるような教育的な関りを行う必要がある<br>学生自身が実際に体験の中から、自ら考え、体験したことの意味付けができる実習方法の検討 |
| 3 | 2010 | 質的研究<br>（実習記録の内容分析） | 重症心身障害児施設実習での学生の学びを明らかにし、在宅療養の場である地域に拡大した実習が「こども看護」を学ぶ上でどのような意義があるかについて検討する | 3年生 | 1日実習<br>（受けもち・吸引など医療技術実施） | 子どもの看護に必要な子どもの権利を尊重することの重要性や、子どもの健全な発達を促すための援助の理解に繋がった<br>子どもを看護する場は施設だけではないこと、看護の対象も子どもだけではなく家族の支援も重要であることを学ぶことができたのではないか<br>生命や人の尊厳について考え、寄り添う気持ちをもつことは、子どもを看護する上でとても大切なことであり、この実習を通して学生が得たものは大変意義深い | 記載なし |
| 4 | 2015 | 質的研究<br>（実習記録の内容分析） | 重症心身障碍児（者）施設での実習効果を明らかにし、実習の効果や今後の課題を検討する | 1年生 | 1日<br>基礎看護学実習Ⅰ<br>（施設実習） | 看護の役割<br>障害をもつ利用者の理解<br>利用者の状況<br>快適な環境づくり<br>非言語的コミュニケーションの困難さと重要性<br>施設の方針（施設が大切にしていることや行事に関すること等）<br>多職種との連携 | 記載なし |
| 5 | 2015 | 量的・質的研究<br>（自記式質問紙調査）<br>（小児看護学実習評価分析）<br>（学びのレポート分析） | 一般小児病棟と重症児病棟という実習場所の違いによる学生の不安、学び、実習評価の相違を把握し、重症児病棟で小児看護学実習を受け入れる際の、より効果的な臨地実習指導を行うための基礎資料を得る | 3年生 | 2週間<br>（受けもち） | 実習前の不安は一般病棟に比べ優位に高値であったが、実習を終えると不安の程度の差が消失<br>「成長発達」「子どもの権利」「患者把握のための留意点」「多職種の中の看護師の役割」「看護観」の学びが豊富だった | 記載なし |
| 6 | 2012 | 質的研究<br>（実習記録の内容分析） | 重症心身障碍児施設での学びの分析により、実習の意義と課題を明らかにする | 3年生 | 1日実習<br>（受けもち・吸引など医療技術実施） | 重症心身障害児への生活支援を通して、反応の少ない子どもとのコミュニケーションや家族を含めた看護のあり方など看護者の学びを深めることにつながっていた<br>重症心身障害児との出会いの場面において、生活環境の違いや子どもの反応のとらえ方などさまざまな不安と混乱を感じていたが、指導者やスタッフの対応から、子どもとの向き合い方を感じ、実践につなげていた | 実習を効果的に展開するため、重症心身障害児の身体的特徴や反応の意味、小児看護を必要とする子どもと家族の生活に関する理解を深めておく必要がある |
| 7 | 2007 | 量的・質的研究<br>（自記式質問紙調査）<br>（実習記録の内容分析） | 2日間の障害児実習の学習効果を明らかにする | 3年生 | 2日間<br>見学実習 | マイナスイメージの変化<br>生命の尊厳を考える<br>看護観を深める | 障がい児実習での学びがその後の実習でどれだけ生かせたか、どんな影響を与えているのかの検証 |
| 8 | 2008 | 量的・質的研究<br>（自記式質問紙調査，面接） | 実習終了後のイメージの変化が学習内容に与える影響を明らかにする | 3年生 | 2日間<br>見学実習 | コミュニケーションや観察を通して患児への理解が変化している<br>患児への理解の変化により重症児への理解が深まり、同じ人間であることや一生懸命生きる姿を学ぶことができた | 否定的イメージで実習が終了した学生に対しては、その原因を振り返る機会をもつことが重要 |
| 9 | 2009 | 量的研究<br>（自記式質問紙調査） | 重症心身障害児病棟での小児看護学実習を通して抱く障害児に対するイメージと、実習前後の経時的な障害児に対するイメージの変化を明らかにする | 3年生 | 4日間実習<br>（受けもち・援助） | 見学実習ではない濃厚な実習での体験が、障がいをもつ人々を実存として感じさせ、同じ人間として尊重するということを強化<br>直接的な接触体験を伴う実習は、障害児に対する理解を変化させ、その定着に有効 | 記載なし |
| 11 | 2009 | 文献レビュー | 障がい児に関する看護学生を対象とした文献検索から、教育形態の違いと学生の学び、指導のあり方をまとめ、今後の教育の資料とする | | | 見学から、非言語的コミュニケーション、触れ合う大切さ、理解の深まり<br>観察の重要性、事故防止、個別性に合わせた援助は、看護の責任と捉える点が特徴的な学び<br>長い実習では、学生の気持ちが対象との相互作用により児の存在価値の認識や看護観まで変化してゆく学び | 小児看護学実習の学習目標とその方略を検討し、講義の工夫が重要<br>実習において、スタッフや施設の環境を整える<br>学生が異なる体験を共有できるカンファレンスなどを運営することが重要 |
| 12 | 2012 | 量的・質的帰納的研究<br>（自記式質問紙調査）<br>（学びのレポート分析） | 障がい児に対するイメージ変化の内容を抽出し、実習での障がい児への理解と学習の成果を明らかにする | 3年生 | 1週間 | 漠然とした不安や抵抗感と言った感情は看護体験を通して、障害児の理解が深まる中で減少<br>障がい児に対する理解を、障害児のできる能力に着眼したものに変化 | 記載なし |
| 13 | 2014 | 質的研究<br>（学びのカードメソッドによる図解の分析） | 実習を通してどのような学びを経験しているのかを明らかにする。<br>実習施設による学びの特徴から実習目標の選択状況を検討 | 3年生 | 1週間<br>（受けもち） | 「発達段階や病態の理解」「観察とアセスメント」「ケアの実践」「信頼関係」「家族」「遊び」についての学があった。 | 臨床指導者と共通理解をし、学生が考え、計画・実践する看護が経験できるような学習環境を整える |

割〉〈非言語的コミュニケーションの困難さと重要性〉であった。1件は、1日実習ではあるが患児を受けもち生活援助を行う中からの学び（文献番号6）で、〈生活支援を通して、看護のあり方など看護者の学びを深めることにつながっていた〉であった。5件は、患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号11，13，5）で、〈観察の重要性、事故防止、個別性に合わせた援助は、看護の責任と捉える点が特徴的な学び〉〈信頼関係〉など、実際に看護師の看護を実践する場面や、自らが実際に患児を受けもち、看護援助を行っていく中から学んだ看護の特徴から構成された。

２）【障がいのある児に対する理解の深まり】

【障がいのある児に対する理解の深まり】は、9つのデータから集約された。内訳は、3件が見学実習からの学び（文献番号4，7，8）で、〈障害をもつ利用者の理解〉〈児に対する理解の変化〉〈コミュニケーションや観察を通して関係性が変化している〉、1件は、1日実習ではあるが患児を受けもち生活援助を行う中からの学び（文献番号6）で、〈さまざまな不安と混乱は、指導者やスタッフの対応から、子どもの向き合い方を感じ、実践につなげていた〉であった。その他5件は、患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号5，9，11，12）、〈実習前の不安は一般病棟に比べ優位に高値であったが、実習を終えると不安の程度の差が消失〉〈漠然とした不安や抵抗感は、看護体験を通して、障がい児の理解が深まる中で減少〉など、看護師の対応や、自ら体験をすることで変化した気持ちから構成された。

３）【重症心身障がい児の特徴の理解】

【重症心身障がい児の特徴の理解】は、2つのデータから集約された。2件とも患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号5，13）で、〈成長発達〉〈発達段階や病態の理解〉と障がい児を理解する上で必要なことから構成された。

４）【生活環境の調整】

【生活環境の調整】は、5つのデータから集約された。内訳は、4件が見学実習からの学び（文献番号1，4）で、〈重症児（者）の特徴と生活環境〉〈快適な環境づくり〉など、他1件は〈遊び〉であり、障がい児が過ごす環境に関しての学びから構成された。

５）【生命の尊厳や権利】

【生命の尊厳や権利】は、6つのデータから集約された。2件が見学実習からの学び（文献番号7，8）で、〈生命の尊厳を考える〉〈障がいをもち生活をしている患児の養育環境を考える機会〉、2件は、1日実習ではあるが患児を受けもち生活援助を行う中からの学び（文献番号3）で、〈生命や人の尊厳について考え、寄り添う気持ちを持つという学びは、大変意義深い〉などであった。他2件は患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号5，9）で、〈子どもの権利〉〈障がいをもつ人々を理解し、尊重する〉であり、実習をする中で感じた子どもの権利と生命の尊厳から構成された。

６）【家族への支援】

【家族への支援】は、3つのデータから集約された。2件は見学実習からの学び（文献番号1，3）で、〈看護の対象も子どもだけでなく家族の支援も重要〉〈重症児（者）の家族への支援〉、1件は患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号13）〈家族〉で、家族への看護も必要であるとの学びから構成された。

７）【看護観の深まり】

【看護観の深まり】は、4 つのデータから集約された。2 件は見学実習からの学び（文献番号 1，7）で、〈看護観の深まり〉〈看護観を深める〉、2 件は患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号 5，11）、〈看護観〉〈対象との相互作用により児の存在価値の認識や看護観まで変化〉で、実習を行う中で自己の看護観を確立・深めていく姿から構成された。

８）【多職種連携】

【多職種連携】は、2 つのデータから集約された。1 件は見学実習からの学び（文献番号 4）で、〈多職種との連携〉、1 件は患児を受けもち看護過程を展開していく中での学び（文献番号 5）〈多職種の中の看護師の役割〉と、実習を通して障がい児看護での多職種との連携を学んだら構成された。

表2 対象文献から抽出した学び

| カテゴリー | 文献番号 | データ |
|---|---|---|
| 重症心身障害児への看護 | 11 | 観察の重要性、事故防止、個別性に合わせた援助は、看護の責任と捉える点が特徴的な学び |
| | 6 | 生活支援を通して、看護のあり方など看護者の学びを深めることにつながっていた |
| | 13 | 観察とアセスメント |
| | 13 | ケアの実践 |
| | 13 | 信頼関係 |
| | 1 | 重症児（者）とのかかわりと看護援助 |
| | 4 | 看護の役割 |
| | 4 | 非言語的コミュニケーションの困難さと重要性 |
| | 5 | 患者把握のための留意点 |
| 障がいのある児に対する理解の深まり | 7 | 児に対する理解の変化 |
| | 8 | コミュニケーションや観察を通して関係性が変化している |
| | 9 | 直接的な接触体験を伴う実習は、関係性を変化させ、その定着に有効 |
| | 11 | 見学から、非言語的コミュニケーション、触れ合う大切さ、障がいに対する理解の変化 |
| | 6 | さまざまな不安と混乱は、指導者やスタッフの対応から、子どもとの向き合い方を感じ、実践につなげていた |
| | 12 | 漠然とした不安や抵抗感は、看護体験を通して、障害児の理解が深まる中で減少 |
| | 12 | 障がい児に対する理解を、障害児のできる能力に着眼したものに変化 |
| | 4 | 障害をもつ利用者の理解 |
| | 5 | 実習前の不安は一般病棟に比べ優位に高値であったが、実習を終えると不安の程度の差が消失 |
| 重症心身障害児の特徴の理解 | 13 | 発達段階や病態の理解 |
| | 5 | 成長発達 |
| 生活環境の調整 | 4 | 施設の方針（施設が大切にしていることや行事に関すること等） |
| | 13 | 遊び |
| | 1 | 重症児（者）の特徴と生活環境 |
| | 4 | 利用者の状況 |
| | 4 | 快適な環境づくり |
| 生命の尊厳や権利 | 7 | 生命の尊厳を考える |
| | 8 | 障がいをもち、生活をしている患児の養育環境を考える機会 |
| | 9 | 障がいをもつ人々を理解し、尊重する |
| | 3 | 子どもの権利を尊重することの重要性や、健全な発達を促すための援助の理解に繋がった |
| | 3 | 生命や人の尊厳について考え、寄り添う気持ちをもつという学びは、大変意義深い |
| | 5 | 子どもの権利 |
| 家族への支援 | 3 | 看護の対象も子どもだけではなく家族の支援も重要 |
| | 13 | 家族 |
| | 1 | 重症児（者）の家族への看護支援 |
| 看護観の深まり | 7 | 看護観を深める |
| | 11 | 対象との相互作用により児の存在価値の認識や看護観まで変化 |
| | 1 | 看護観の深まり |
| | 5 | 看護観 |
| 多職種連携 | 4 | 多職種との連携 |
| | 5 | 多職種の中の看護師の役割 |

＊色付きNoは「見学実習」

3．重症心身障がい児病棟（施設）実習での課題

重症心身障がい児病棟（施設）実習での課題としては、6 件（文献番号 1，6，7，8，11，13）あり、主に【学習環境の整備】【事前学習の必要性】に関することであった。【学習環境の整備】は、見学実習において〈「目にしたこと」や「説明されたこと」を学生自身が意識的に学びに変えることができるような教育的な関りを行う必要がる〉や、体験型実習で

は〈(経験型実習教育について）臨床指導者と共通理解をし、学生が考え、計画・実践する看護が経験できるような学習環境を作る〉など、学生が深い学びができそれを定着させるための【学習環境の整備】に関することであった。【事前学習の必要性】に関しては、〈実習を効果的に展開するため、重症心身障害児の身体的特徴や反応の意味、小児看護を必要とする子どもと家族の生活に関する理解を深めておく必要がある〉など、重症心身障害児を理解するための【事前学習の必要性】であった。

## Ⅵ. 考察

今回、重症心身障がい児病棟での小児看護学実習での学習効果と課題について記された研究 11 件を概観し、結果により重症心身障がい児病棟での小児看護学実習への示唆を以下に述べる。

### １．文献に見る小児看護学実習の動向

今回対象とした 11 文献の発表年を概観すると、2015 年に発表されたものが 3 件で対象としたものの中では一番多かったが、大きな差はなかった。実習対象学年は、1 件のみが 1 年生の基礎看護学実習 I での見学実習で、実習方法としては 1～2 日の見学実習か、1～2 週間の看護過程の展開実習であった。今回、実習形態は分析していないが、これらのことからも、病院実習での受けもちをもち看護を展開することが困難な小児看護学実習の、実習施設の多様化がうかがわれる。

### ２．重症心身障がい児病棟（施設）実習における学習効果

今回対象とした文献から、8 つの学びに関するカテゴリーが抽出された。これらを見学実習、受けもちをもっての実習をの視点で概観してみたが、双方共に看護観・倫理観など多くの学びが得られていた。

その中でも【重症心身障がい児への看護】【障がいのある児に対する理解の深まり】は、1～2 週間と長期に受けもち、実際に看護を展開しての学びの方が多かった。これは、須賀ら（2009）が「2 週間と長い期間緒実習では、学生の気持ちが対象との相互作用により児の存在価値の認識や看護観までも変化してゆく学びができる」と述べているように、長期間受けもつことで児をより深く理解し、児を取り巻く環境にも目が向き、看護を考えていく中からの、深く大きな学びが得られているためであると考える。

学生は、重症心身障がい児病棟（施設）とはどんな場所か、どの様な子どもがいるのかなど、どうやって接していけばいいかなど、漠然とした緊張と不安の中実習にのぞんでいる（眞鍋，2011）。そんな緊張や不安は、看護師や指導者の児への関わりや援助を【重症心身障害児への看護】観てその方法を学び、コミュニケーションや看護を実践していく中で【障がいのある児に対する理解の深まり】へと変化していっている。眞鍋（2011）は「学生は、重症児（者）施設における実習から、個々に違う子どもたちの言葉ではないメッセージをキャッチするための細やかな観察力や、個別性を考えること、QOL について考えること、子どもたちのもっている力や可能性を引き出すことの大切さについて、考えや気づきを述べている」と報告していることからも、学生は【重症心身障がい児への看護】を目にし、実践する中から【障がいのある児に対する理解】を深め、更に【重症心身障害児の特徴の理解】を学ぶことで、児の【生活環境の調整】や【家族への支援】、【多職種連携】

に目が向けられていく。そして、これらもって【生命の尊厳や権利】【看護観の深まり】へと学びが進んでいくのではないかと考える。

学生は、一般病棟とは違った漠然とした不安や緊張を抱き実習に入ることとなるが、その学びは多く、重症心身障がい児病棟（施設）での実習は、児の QOL を考え看護観を深める、看護の基礎となる学びが多い機会となると考える。

３．重症心身障がい児病棟（施設）実習を行うにあたっての課題

学生が大きな学びを得るためには、先ずは児を理解することから始まる。眞鍋（2011）は「初めは障害をもつ子どもと関わること自体に困難を感じ、手を出せない学生もいるが、そのような困難を乗り越えたり、考えたりすることは、子どもの権利や生活、命を支援する看護の実習としては、貴重な体験となり、学びや看護観を深める機会となっている」と述べていることからも、【障がいのある児に対する理解の深まり】は重要なことである。そのためにも、大きな緊張や不安を抱いている学生の気持ちを、変化に向けて導びく教育的な関りが重要であると考える。しかし、実習を終えても障がいのある児への理解が深まらない学生、更に、眞鍋（2011）が「障害をもつ子どもと自分自身がどのように向き合うか、命のあり方についてどう考えるか、という問題にぶつかる学生も少なくない」と述べているように、しっかりと向き合い取り組むがゆえに悩む学生も出てくることが考えられる。臨床指導者や教員は、このような感情をしっかりと理解し受け止め、学生の学びが効果的かつ深まるような関わりを心掛けていく必要があると考える。

また、実習を効果的に行うためには、学生の【重症心身障害児の特徴の理解】を少しでも早くすることが大切であり、事前に学習をし、実習にのぞむことも有効であると考える。実際、対象文献内でも、多くの学校が実習前に、講義など何らかの事前学習を取り入れていた。知識をもって実習にのぞむこと、学生自身が学び関心を持つことが児への理解を深め、重症心身障がい児看護からの多くの深い学びが得られると考える。

## Ⅶ．結論

１．重症心身障がい児病棟（施設）での実習は、見学実習でも看護過程展開の実習でも多くの学びが得られる。

２．患児と直接触れ合うことで、より児に対する気持ちの変化が起こり看護観の深まりとなる。

３．学生が、緊張や不安の困難を乗り越え、実習が効果的に行われるような教育的な関りや、実習環境を整えていく必要がある。

## 文献

藤原理恵子，今村美幸，上野瞳 他（2015）．看護大学における小児看護学実習の指導方法の検討一重症心身障害児施設見学実習での学習内容の分析一．健康科学と人間形成，1（1），65-74.

原朱美，永島美香，勝田仁美 他（2012）．小児看護学実習における重症心身障害児施設での実習課題．近大姫路大学看護学部紀要，5，69-74.

眞鍋裕紀子（2011）．重症心身障害児（者）施設における学生実習．小児看護，34（5），

661-665.
松下聖子，金城やす子（2014）．経験型実習を取り入れた小児看護学実習における一般病院の小児病棟と障害児施設での学びの特徴．名桜大学紀要，（19）77-84.
光楽香織，甲斐寿美子（2007）．小児看護学実習における重症心身障害児（者）病棟実習の学習効果ー2 日間の見学実習を導入することの意義ー．小児看護，38.113-115.
光楽香織，甲斐寿美子（2008）．小児看護学実習における重症心身障害児（者）病棟実習の学習効果＜第 2 報＞－イメージの変化が学びに与える影響ー．小児看護，39.65-67.
永島美香，女鹿瞳，勝田仁美（2010）．子ども看護学実習における重症心身障害児施設実習の意義ー実習での学生の学びからー．近大姫路大学看護学部紀要，3，51-56.
篠澤由香，上杉佑也，樋廻旬子 他（2015）．重症心身障害児病棟における小児看護学実習の一考察ー一般小児病棟実習との比較からー．日本看護学会論文集　看護教育．45，106-109.
須賀香織，小口多美子（2009）．重症心身障害児に関する看護研究の動向ー2003 年～2008 年までの文献検索による学生を対象とした研究の動向ー．看護教育，40，215-217.
杉本幸枝，山本智恵子，吉田美穂 他（2015）．学士課程での基礎看護看護学実習 I における社会福祉施設での学習効果．新見公立大学紀要，36，13-19.
富澤弥生，鈴木千明，石田眞知子 他（2009）．重症心身障害児施設実習における学生の障害のとらえ方．小児看護，40，162-164.
梅田尚子，小笹幸子，笠原香里 他（2009）．重症心身障害児病棟実習が看護学生の障害児に対するイメージに及ぼす影響．看護教育，40，208-220.
若瀬淳子，山元恵子（2012）．障がい児施設での学生の障害児のイメージ変化と学習の成果ー学生の実習記録の内容分析からー．日本看護学会論文集　小児看護，42，25-28.